



無茶振り
今日も
タヌキに
される

著・イラスト
FALSE

主な登場人物

ニッ岩マミゾウ……佐渡出身の化け狸。正体を隠して商店&貸金業をやる傍ら、女苑達をこき使い混乱を巻き起こす。

依神女苑……疫病神。薄給でマミゾウに雇われ、商家への潜入と攪乱を担当する。元命蓮寺門徒。

封獣ぬえ……正体不明を操る妖怪。マミゾウの親友にして命蓮寺現役門徒でもある。

聖白蓮……強力な魔法を操る命蓮寺の住職。マミゾウ達の巻き起こす騒動に心を痛めている。

本居小鈴……貸本屋鈴奈庵の看板娘。どんな文字でも読みこなす判読眼の持ち主。

お喜、お杉、お源、お禅……マミゾウの下で働く小狸達。

今日もタヌキに
無茶振りされる
FALSE

偽者の脳内

当作品は ZUN 氏が制作している「東方プロジェクト」シリーズの二次創作作品です。

本作における人物・団体は全くもって原作に一致するものではありませんので、あしからずご了承ください。

ある夜のことである。人里には、すっかり闇の帳が下りていた。並みの人間なら野良妖怪に襲われることを恐れ、戸締りを厳として外を出歩くことを差し控える時間帯だ。

その頃合いにも関わらず、闇の中を進む影があった。場所はある商家の裏手。正体は質素な和服を着た、その女中らしき女である。それは草履が砂利を踏みしめる音にすら気を遣い、屋敷の外塀に向かっていった。

女は裏木戸の近くまで差し掛かると、なぜか塀に背中をみっしりと貼り付けた。

「来てるわね」

虚空に向けて話しかける。裏庭には女の姿以外に誰もいない。しかし女の背後、塀の外ともなれば話は別である。

「予定に変更なし。馬鹿旦那は明日の午の刻過ぎにあいつを蔵へ招くはずよ」

すると塀の上を何かが飛び越えてきた。物体は小さく、闇の中では形すら判別がつかない。女はそれを迷いなく掴み取った。

塀の外に気配はない。女は「ふん」と一息吐くと、素知らぬ顔で屋敷に戻っていくのだった。

§

翌日の昼下がり。一人の娘が、往来をはずむ足取りで歩いていた。昼休みを終えて仕事場に

戻っていく職人達の間を縫う度に、髪留めに結った大ぶりの鈴がカラコロと鳴った。

その日の本居小鈴は、背にあまるほどの背負子を担いでいた。担いではいたが、括り付ける荷物はない。そんな小鈴が商家の前に差し掛かったところで背負子を下ろすと、身なりを整え暖簾を潜り抜けた。

「あのごめんください。鈴奈庵すずなあんの者ですが」

声をかけると、小上がりで算盤を弾いていた番頭が一瞬だけ憂いた顔を小鈴に向けた。直後、すぐに外向けの笑顔を作り直して立ち上がる。

「へえ、いらっしやいませ。話は若から聞いております。若は先に蔵へ入っておりますので、奥へどうぞ。案内いたします」

「お邪魔いたします」

小鈴は番頭の様子を、多忙による疲れと見て取った。何より、これから見るであろうものに對して気が急いてもいた。

番頭は小鈴を先導して通り庭を抜ける。そうして裏庭に出ると、奥に一件の蔵が建っていた。漆喰は薄く泥で汚れ、いささかの年季を感じさせた。分厚い扉は既に半開きとなっている。

「こちらでございます。ささ、お入りになつて」

「ええ、それでは」

遠慮なく、と続けようとした瞬間に事件が起こった。蔵の中から、重いもの同士がぶつかる

音が立て続けに聞こえてきたのである。

「ひあああああつ」

次いで、悲鳴だ。扉が開いて、蔵から若い男が転がり出した。頭などに打ち身傷をこしらえている。小鈴は彼の姿を見下ろすと、目を白黒させた。

「あれ、若旦那さん？」

番頭はなぜか、若旦那と蔵の奥とを交互に見た。

「若、これはどういった趣向で？」

「ばっ馬鹿、違う！」

若旦那が右腕を上げる。その震える人差し指は、蔵の奥を指していた。

「ばば化け物が出やがった。蔵ん中から、突然出てきたんだ！」

「化け物ですとお？」「ばば化け物だってえ!？」

番頭が目を細め若旦那を見下ろす。一方の小鈴は、口に手を当て蔵の中に目を凝らしていた。

「私、中を見せてもらってもよろしいですか？」

「それは構いせんが」「ばばっ馬鹿っ、危ねえぞ！」

小鈴は恐怖よりも好奇心を優先させた。扉をずらして足音を忍ばせ蔵に踏み入る。蔵の中はありがちな造りのもので、入って両側に雑貨の収まった棚、奥には二階に上がるための小さく急な階段があった。

先程の物音は、若旦那が階段を転がり落ちた音であろう。小鈴はそう察しをつけると階段に手をかけた。上の床板に手つき、なかばよじ登るようにして二階に上がる。おい気をつけろ、という若旦那の声が外から聞こえてきたが、あまり気にならなかつた。

天井が近づいてくる。小鈴は二階を下から覗き込もうと、階段の途中で体をひねって、がた「ひゃっ!?!」

「ただだ大丈夫か!?!」

小鈴は体勢を立て直した。屈み込んで扉の外を見ると、若旦那が尻餅をついたまま手足をばたつかせていた。

「すみません、足元が滑っちゃいました」

番頭が胸をなで下ろす。

「気をつけて下さいよ。足元お悪いですから」

「ええ、でも」

改めて二階の暗がりを目を凝らした。

§

「それで？ 若旦那の言う化け物はおったんかい」

二ツ岩^{ふたついわ} マミゾウはティーカップを両手に抱えて、小鈴に聞き返した。四畳半ほどの部屋を、みつしりと本棚が埋め尽くした空間である。マミゾウが座るソファとテーブル、そして小鈴が座る番台もあって人によっては息が詰まりましょう。

「それがですねえ、化け物なんて影も形もなかったんですよ。私も番頭さんも様子を見たんですが、若旦那さんだけは化け物だ化け物だって。そしたらご主人さんまで出てきて、なんだかカンカンになってしまつて」

「蔵一つ開けた程度で、随分大げさじゃ」

「ご主人さんが若旦那さんに言うには、狐か狸に化かされたのだろう、お前が遊び呆けているから罰が当たつたのだつて。結局古本の件は、それでうやむやになつてしまつたんです」

小鈴はそこで一拍置いて、声を少々潜めた。

「まさか、何もやってないですよね？」

マミゾウが肩を揺する。長髪をまとめた木の葉の髪留めが小さく揺れた。

「かかか、そんなわけがあるか。なんの道理があつておぬしの仕事を邪魔する必要がある」

「で、ですよね」

小鈴は番台に立て肘をついて、宙に目を泳がせる。

「でも、残念です。今回はかなり脈ありだと思つたのに。どうしてこう上手くいかないんだろうなあ。この里の中で本を扱う場所なんて、限られているはずなのに」

「そうホイホイと妖魔本が見つかるものかよ。これまでも簡単ではなかったのであろう？」

「それは、そうなんですけど。あ、いらっしやいませ」

貸本屋「鈴奈庵」に現れたのは、貧相ななりの里人だった。小鈴はマミゾウに軽く目配せをすると、新たな客の応対に入る。

一方のマミゾウはティーカップをテーブルに置くと、そのまま小鈴達の視線を避けて暖簾を潜った。お遣いへ向かう奥方達、寺子屋帰りの子供らなどが「庵」の文字が傾いた看板の前を行き来している。

マミゾウは人の流れとは逆の方向、鈴奈庵の脇を流れる小運河にかかる小橋へと足を向けた。ややあつて、その後ろに真つ黒い着物を着た娘が追いついてくる。

「この嘘つきめ。大いにあいつの仕事を邪魔してるじゃないの」

「盗み聞きしとるおぬしも大概じゃわい」

その娘、封獣ぬえがマミゾウに肩を並べ、赤い目を向け薄ら笑いを浮かべた。着物の背中が、生き物を仕込んだように小さく蠢いている。

「それに僕は嘘なぞついたらん。化かしたのは僕ではなく、おぬしの正体不明のタネであろう」「詭弁」。旗を振ってんのはマミゾウじゃない。そんなにあの『判読眼』に悪い虫がつくのがいやなら、お得意の人脈コネでいい相手でも見繕ってあげたら？」

マミゾウは歩きながら、顎をしゃくり上げた。

「僕の眼鏡はちいと厳しいぞ。あ奴の仕事と能力に理解があつて、なおかつ火遊びとは無縁でなきやならん。本は燃えやすいしのう」

「火消しても紹介するといいや」

軽口を叩き合いながら、二人の姿は雑踏の中に消えた。

§

鈴奈庵から少し離れた場所に、一件の茶屋があつた。

商い前の店内では、薄桃色の着物で揃えた女給達が肩を並べている。そのうち二人が集団の前に立ち、片方がもう片方に手を差し出している。

ちなみにその女給の襟口からはなぜか分厚い襟巻きがはみ出し、首回りを覆い隠していた。

「今日から女苑が職場復帰するよ。シフトとか、よしなにやってね」「はーい」

他の女給達が力強く返す。対する依より神かみ女苑じょおんは、なぜかむくれた顔を作っていた。髪をうなじのあたりで二つに結つて下ろし、丸渕の伊達眼鏡をかけている。

「あつさり受け入れやがった。不良店員の久々の復帰だつちゅーに」

「ここでは日常茶飯事だからね。言つた通りになつたらう？」

襟巻きの女給こと赤せき蛮ばん奇きが、女苑の愚痴を耳ざとく聞きつけた。

「人里に紛れる妖怪御用達の職場ねえ。裏で客を食ってるんじゃないだろうな？」

「妖怪ばかりじゃないよ。赤いお屋敷でのご奉公に嫌気の差した元メイドの妖精に、あんたみたいな格の低い神、人間だが本業ばかりじゃ御飯おひたにありつけないよろず屋稼業もいたりする。そうした連中が集まって、人里で遊ぶ小遣いを稼ぐために開いたのがこの茶店ってわけ」

女苑は店内に散っていった女給達の姿を眺める。屋内にも関わらず頭巾を被った者、背中がやけにこんもりしている者など千差万別だ。いずれも人外の気配を漂わせている。

「どこもかしこも世知辛いものよね。人間襲って怖がらせるばかりじゃ腹は膨れないと」

「代わりに就労規定はゆるゆるよ。あんたみたいに狸の親分からでかい仕事を貰って、一ヶ月くらい休職したりそのまま戻って来なかつたりする奴もいる。みんな都合のいい隠れ蓑としてあり難く使わしてもらってるってわけ」

「その都合のいい枠組みを上手く仕切ってるのが、あの狸ってわけね」

赤蛮奇は目を細めて、女苑の姿を睨んだ。

「あんたはいつつも親分に反抗的だねえ。色々目をかけてもらってるんじゃないのかい」

「もうちょっといい見返りを貰えれば、喜んで尻尾を振るんだけどね。今回の仕事もどれだけ払ってもらえるのかわかつたもんじゃないし」

その時店の外から、一人の女給が小走りにやってきた。

「女苑ちゃん、あなたにお客様なんだけど」

女苑の顔が歪む。店の外から押し寄せてくるのは、有無を言わさぬ超人の気配であった。

「突然だけど具合が悪くなったんで奥行きまゝす。留守って言つといて」

「聞こえてますよー?」

暖簾が動いた。頭頂にかけて紫色のメッシュを入れた金髪が、布の合間で揺れている。

女苑は二三歩後ずさると、その聖白蓮ひじりびやくれんに向けて拳闘ポーズをとる。

「寺には戻らないわよ?」

「別に連れ戻しに来たわけではないですから、ご安心を。お時間、あるかしら。少し聞きたいことがあるのだけれど」

女苑は拳を解かない。そんな彼女の背中を小突く手があった。首だけ振り向くと、赤蛮奇が茶碗の二つ乗った盆を突き出していた。

「あなたのお客でしょ。相手しな。あのオバケ坊主が苦手なのは、あんただけじゃないから」

「しゃあないなあ。それで、このお茶代は誰が払うのよ」

「当然あんた持ちで。金持ちでしょ?」

「そんな普段からふんだくってねえっての」

女苑は両手で盆を抱えると、白蓮には顎で茶屋の外を指し示す。店先には、一基の長椅子があつらえてあつた。白蓮と二人、茶の湯の盆を挟んで肩を並べる。

「それで、用って何さ」

「昨晚、里中で妖怪騒ぎがあったのは知っているかしら」

女苑は淀みなく茶碗の一つを手にした。

「おおかた、お行儀の悪い奴がやらかしたのでしようよ。珍しい話でもないわ」

「場所は中央にある呉服屋の一つ。そちらの跡取り息子さんが、蔵で得体の知れない化け物を目にしたと言うのです。だけど見たと言っているのは、その息子さんだけなのだそうですね。誰にも信じてもらえないので、困り果てて命蓮寺へ相談に来たようなのですが」

湯気の立つ茶の湯に口をつけ、すぐに離す。もう少し湯冷まししてから持つて来いってのと口の中で小さく呟いた。

「その手の相談なら、神社じゃね？ やましいことでもしたんじゃないの、その息子とやらは」
「個人の事情にまで踏み込むつもりはありませんから、そこまでは。ともあれ、相談を無碍にするわけにはいきませんので調べているのです。その呉服屋さんに伺ったのですけど、そこで気になることを耳にしまして。ちょうど昨日に、暇を貰った女中さんがいたそうですねですよ」
「へえ。その女中が犯人じゃないかと、白蓮警部は疑ってるわけですか？」

白蓮もまた茶の湯を手に取り、涼しい顔で茶を少しすすった。

「そういうわけではありませんが。話は変わりますが女苑、あなたは今日からこのお店に復職したようですが、昨日まではどこで何を？」

女苑がもう一度茶碗を口元に添える。唇に痛みを覚えてすぐに口を離した。

「ちよつとしたお仕事よ。あんたもここがどういう店かくらいは知ってるでしょ？」

「そのお仕事とは？」

「話したくないわね。私個人の事情によるものとか言えないわ。それとも何かい、呉服屋の息子の事情は駄目でも私の事情なら問題ないってか？」

「それは、一理あります」

白蓮は再び茶碗を傾けてから、盆に戻した。中にはわずかな茶渋を残すばかりである。

「ひとまず今日のところは帰ります。騒ぎの件について何か心当たりがあるのなら、いつでも命蓮寺みょうれんじにおいてなさいね。例え心当たりがなくても、座禪の席はすぐに用意できますから」

「そういう一文の得にもならない修行に耐えられなくなったから、私や寺を出たんだよ」

白蓮は薄く笑うと、笠をかぶって店先に背を向けた。女苑は遠ざかる白蓮の姿を視線で追いかけるが、三度茶碗を手取る。数秒でろくろを回したくなる程度に、未だ熱い。

「舌まで強化してんのか、あの僧侶は」

「ばっちりあんたを疑ってんねー、あれ」

振り返る。暖簾から赤蛮奇が顔を出していた。

「盗み聞きしてんじゃないわよ。趣味が悪い」

「あの坊さんよくここにも勧誘に来るから、気が気でなくてさ。それで実際のとこ妖怪騒ぎの犯人は、あんたなわけ？」

「断じて、違う」

間髪入れずに言い放った。

「私は別に、その呉服屋から財運を奪っちゃいけない。どこの服屋かは知らないけれど」

「疫病神の力を使わなくなつて、騒ぎは起こせるよね」

女苑が立ち上がった。素早く赤蛮奇の眼前に歩み寄り、首に手をかけた。

「ちよ」

言い切る間もなく、女苑は赤蛮奇の首を引っこ抜いた。生首の断面は滑らかな肉の層である。

首なしの胴体が動いて、女苑の手を振り払った。自らの首を奪い返して、肩の上に乗せる。

「いきなり何すんだ！」

「つまらないこと詮索してつと、今度はその首埋めんぞ抜け首女め」

「だからつて往来でやるこたないだろ」

道行く里人が、ただ今の一瞬に何が起こつたのかと、店頭で視線を集めている。

「ところで蛮奇、客足がひと段落ついたらちよつと席外すけど構わないね？」

「誰が、赤が姓で蛮奇が名前か。復職一日目なんだから、ちよつとは他の連中と親交を深めても

罰は当たらないよ？」

女苑は盆を抱える。赤蛮奇に見せたのは、無然とした顔だった。

「そつちも大事だけど、休職中の手当を狸からせしめないといけないんだわ」

八つ時を過ぎた。店の中は、長居する常連客が数人たむろするばかりとなった。そのうちの一人である老爺が、女苑に声をかけた。

「のう女苑ちゃん、次はいつ頃までここで仕事するんかね」

その老爺は、女苑が茶屋に腰を落ち着ける前から通いつめている常連客であった。彼が女苑に声をかける頻度は、他の女給より明らかに多い。誰かに指摘されるまでもなく、女苑に目をかけているのは明白であった。

「んー、次のお仕事が見つかるまでかなあ。いつになるかは、ちょっとわかんないや。どこも不景気で困っちゃう」

女苑は唇に人差し指を寄せて、そう言った。

「どうだい、早いとこ身を固めちまっては。儂が伝手を当たってやろうか？」

「もうご隠居さんたらずぐそういう話。私は独り身の方が気楽なんですってば」

適当に老爺と話を合わせて、やり過ぎす。女苑は文字通りに、こういう手合いと星の数ほど付き合ってきた。手玉に取るくらい造作もない。

「ちよっと後ろに下がります」「はい」

前掛けを外して上着を羽織ると、裏口から外に出る。里の外れに向け、五区画ほどまっすぐ歩いた。すると長屋町の隅っこに一件の商店が見えてくる。

枯れ草色の暖簾を張った、小さな店である。暖簾には丸に瓢箪の家紋をあしらひ、看板には「二ツ岩商店」と記されていた。

「ごめんくださいな」

楚々とした仕草で店に入っていくと、ほのかな土の香りが鼻をついた。土間の隅には膨れ上がった麻袋が、土囊じみて積み上がっている。その脇を草履をばたばた鳴らしながら、一人の奉公人が走り寄ってきた。前髪を髪留めでたくし上げた、年端もいかない少女の姿をしている。「ああ、依神さんいらっしやいませ！ いつもお世話になっております」

女苑はその奉公人に無言で手の平を見せた。目を丸くして立ち止まる。女苑は彼女に、両手で自身の頭上を指差して見せた。

奉公人は女苑の仕草を見て、不意に顔面を引きつらせた。彼女の頭の上には、丸みを帯びた三角形の耳が一对生えていた。顔を真っ赤にして頭を撫でると、耳は髪の中に潜って消える。

「すすみません、うっかりしましたあ」

「お客が私でつツイてたよ？ 人間だったらまた大騒ぎになってたかもね」

「いやあ申し訳ありませんね、ほんと」

後ろからもう一人、奉公人の少女が顔を出した。背丈は前髪上げと同じくらい。そばかすの

ある顔を女苑に向けていた。

「お喜のぶときたら、いつもそそっかしいんですから。おおかたお源げんと世間話にうつつを抜かして、化け術がおろそかだったのでしようよ」

「お杉すぎちゃん、言い方酷い。経緯いきざらは合ってるけど」

「そうそう、あまりお喜を虐めてやるものではない」

店の奥から、さらに声。小上がり三人ほどの人影がある。番台で煙管を吹かすマミゾウ。向かいであぐらをかいてくつろぐぬえ。脇で黙々と算盤を弾いているのはお喜お杉と呼ばれた奉公人と揃いの法被を羽織った少女で、目が見えているのか疑わしいくらいに細い。

「狸ねこつちゅうもんは化かしてなんぼじゃが、退治されてなんぼでもある。お喜くらいに多少の隙があった方が、大成しやすいものよ」

お杉はマミゾウの方を向いて、肩をすくめた。

「でも親分、お喜は隙があるって程度じゃないっすよ」

「そこはほれ、仲間です上手いことフォローし合えばよし。幸いここでは狸しか働いとらん故、多少は失敗の余地もあるというものじゃろ」

「庇かばつてやる側の身にもなってもらいたいもんですがね。そうだお喜、あんたなるだけお源と一緒にいるようにしな？ あの子気が利くからあんなのドジも上手く取りなしてくれるよ」

「ええ、お杉ちゃんも手伝ってよ」

「私は忙しいの。あんたよりも沢山の仕事を任されてんだから」

「あ、あのう」

新たな奉公人が、お喜お杉のさらに後ろから顔を出した。いくぶん量の多い髪の毛を首の下あたりでまとめてお下げにしている。それが台帳をめくりながら、お杉に告げた。

「えっと『寒戸三号』の在庫量がね、間違ってるみたいなの。お杉ちゃんが株を数えたよね？」

「え、マジで」

お杉は顔を青くして、台帳を手を取った。

「それぞれそんなはずはないでしょう、ちゃんと数え直した？ ちょっとお喜、手伝いな」

三人はそそくさと通り土間の奥へと消えた。残された女苑が小上がりにしゃがみ込む。

「登場人物紹介のごとき寸劇だったわね」

「まだ半人前じゃしの、いつもああいいう具合よ。おいお禅、女苑にも茶を入れてやれ」

「合点、親分」

マミゾウにお禅と呼ばれた糸目の奉公人は静かに立ち上がると、小上がりを下りてこれまた奥へと向かった。マミゾウが煙管の燃えかすを灰皿に落とす。

「それで、おぬしはなんの用じゃ」

「すつとぼけたことを。密偵のお代をいただきに来たに決まってるじゃない。言うほど女中に溶け込むのは簡単じゃないんだから、危険手当ははずんで頂戴よ。それから」



お源

お杉

お喜

お禅

女苑は身を低くして、声を落とす。

「白蓮が店に来た。あのどら息子、命蓮寺へ相談に行ったみたいね」

「はー、面倒なことになったねえ」

ぬえがにやけた顔を崩さず、間延びした声でそれに返した。

「もうちょい、緊張感を持ったら？ あんた寺住みなんだし。私達がつるんでることだって、

白蓮^{あいつ}は知ってるんでしょ？」

「まったく、嘆かわしいことじゃ」

マミゾウは袂を探る。そうして取り出した小さな鍵を手にすると、小上がりの奥にある金庫へと身を寄せた。扉に据え付けられたダイヤルを右に左に回す。

「あの御仁と儂の目指すところは、そうそう変わらんとと思うんじゃないがの。どうにも儂らが悪い人間をこらしめることに理解がない」

「今後白蓮の邪魔が入るようになったら、面倒だわ。危険手当を乗せてもらわないとね」

「ま、本当にそうなった時に追い追い考えるところじゃ」

金庫がガチャリと音を立てた。扉が開く。マミゾウは金庫の中から一通の封筒を取り出し、女苑に差し出した。

女苑はすぐさま中身を改める。紙幣の束の厚みを確かめると、露骨に眉を歪めた。

「少なくね？」

「潜入先でも、少なからず俸給は貰っていよう？ それに『けじめ』の代金を支払い終えたとはとても言い切れんしのう」

「またその話だよ。完全憑依の後始末は私と姉さんできっちりやらされた。あんたの夢人格も派手に暴れ出す前に退治してやったんだぞ。感謝してもらいたいくらいだわ」

「そいつぁおぬしと賢者との間のけじめであって、儂らは関係ないからのう。それに」

その時、店の奥からお禪が茶碗の乗った盆を持って戻ってきた。彼女は女苑に茶を差し出す。そこへマミゾウが声をかけた。

「のう、お禪。女苑による『被害額』は、いかほど残っておったかの」

「卯月の時点で締めて四百七十二円八十七銭となっております」

女苑は茶碗から手を滑らせかけた。

「おいこらちよつと待て、先月よりも百円近く増えてんじゃねーか！ また利率が上がったとかなうつもりじゃないだろうな!？」

「すまんのう、また三人ほど新たな『被害者』の申し立てがあったんじゃ」

「ずえーってえ嘘だろ？ あんたか、その被害者とやらが嘘ついてる！」

「無論きちんと身辺調査した上で、手を差し伸べとるに決まっとる。どうしても疑うなら被害者に直接おぬしを紹介してやることになるがのう」

女苑の額に青筋が浮いた。

「おぬしにやましいことがないのなら、面通しても別に問題はあまい？」

「ぐぬぬぬ」

女苑は菌ぎしりした挙句、結局封筒を自分の懐に収めた。

「いつかあんたのインチキ暴いて、惨めな雇われ暮らしからおさらばしてやるわ」

「その意気で次の仕事もきちんとこなすとええぞ。さすれば報酬も上げてやらんこともない
けつ、と吐き捨てて茶を平らげた。女苑は傍に座っていたぬえを見る。

「あんた、よくこんなのと友達やつてられるわね」

「そうかい？ 少なくとも退屈はしないよ」

女苑は無然としたまま店を後にした。ぬえはその姿を見送ってから、マミゾウに振り返る。

「ちよつと虐め過ぎじゃない？」

「なあに、あ奴にやこれっくらいがちょうどええ。甘い顔するとすぐにつけ上がるからのう。
ところで、ぬえよ。白蓮公の件じゃがな」

「ああ、私にも締め付けが来そうだね。まあ、そっちはなんとかするよ」

マミゾウはぬえに、無言で手の平を見せる。その時暖簾が揺れて、新しい客が姿を現した。
若く小太りだが、身なりのいい男である。

女苑が残っていたら、男と鉢合わせて面倒なことになっていたかも知れない。

「なんだこりゃ、随分土臭い店だな。二ッ岩商店ってのは、ここでもいいのかい」

人里からほど近くにある小山の上に、白蓮の寺、命蓮寺があった。

白蓮は宿坊の一室で静かに座り、机の上に広げた奇妙な物体に目を通していた。魔人経卷まじんきょうかんの上を、七色に輝く幾何学模様が横に流れていく。魔法使いたる白蓮が作ったこの魔道具に読み書きできるのは、白蓮自身ただ一人だけである。

「白蓮、私だ。入らせてもらっていいか」「どうぞ」

障子戸が横にずれて、脛まで届くほどの長い髪を持つ少女が部屋に足を踏み入れた。頭にはなぜか女の能面を斜にかぶっている。その少女、秦はたのころろが白蓮の隣へ正座する。

「私の舞台を見に来た者に、それとなく話を聞いてみた。白蓮の言っていた呉服屋の若旦那が、どういふ奴なのかと。探偵とかいふ奴みたいで、なかなか楽しかった」

「ありがとうございます」

ここは面霊気という妖怪である。しかし時折里や神社などで能楽を披露して、少なからぬファンをつけるなど人間とは比較的親交が多い。白蓮は命蓮寺の者に人間との過度な接触を禁じる代わり、ここに人里の情報集めを頼むことがあった。

「それで、評判はどうでしたか」

「人間の感情は擲擧に満ちていた。なんでも家が小金持ちなのをいいことに、随分と遊んでいるとか。この遊びというのがよくわからんのだが。人間は財産を持つと、弾幕ごっこをたしなむようになるのか？」

「うーん、多分違う遊びだと思えますよ」

こころの頭の面が、猿面にすり替わった。こころ自身は無表情のまま、支えを失った人形のように首を傾げている。

多分、こころが知るべきではない遊びの一つだと白蓮は直感した。俗世の人間が手を染める遊びの仔細といえ、今も千年前もそうそう変わらないものだ。

「しかし、白蓮。その若旦那を襲ったのはマミゾウなのだろう？ あいつならこらしめ目的で若旦那を化かしたように思えるのだが」

「まだそうと決まったわけではありません。状況が状況ですが」

命蓮寺に妖怪騒ぎが持ち込まれるのはこれが最初ではない。妖怪退治の先達たる博麗神社はくれいは人里から一刻近い距離を要し、道中野良妖怪や野犬も現れる。事なかれ主義の人間には大変に行き辛い場所だ。命蓮寺はそんな人間達の、手軽かつ安易な駆け込み寺となっていた。

しかし命蓮寺に駆け込む者には、なぜか脛に傷を持っている傾向が強くもあった。寺の者は以前に「姐さんの人柄がそういう者を呼び寄せてしまうのではないか」と評されたことがある。そんな連中に決まってちらつくのが、マミゾウの影だ。彼女、というか彼女らの手口も概ね

見当がついている。よく彼女につるんでいるのが、ぬえと女苑の二人である。

まず、女苑が標的に近づく。疫病神たる彼女は、人間社会に潜り込むのを大いに得意とする。口八丁手八丁を駆使して標的の懐へと忍び寄り、情報収集や扇動工作を行う。標的は女苑の力で気が大きくなって、金遣いが荒くなり大胆な行動をとりやすくなる。

続いて、ぬえが騒ぎを起こす。彼女が使う正体不明のタネは、見る者の認識を狂わせる力を持つ。標的に恐ろしい怪物を見せたり、常識では説明できない怪奇現象を引き起こしたりして、標的の心を千々に乱す。若旦那が見た化け物というのも、正体不明のタネによるものだろう。

そこで満を持してマミゾウが登場する。彼女が開く「二ツ岩商店」は表向き種苗や腐葉土を扱う店だが、裏では「困窮者の救済」を名目に金貸しをする。ある時は怪しげな魔除けを買うために、またある時は一時の安心を得るために、マミゾウから金を借りる。きちんと返済する者には良心的だが、そうでない者には厳しい追い込みをかけて自身の支配下に置いていく。

白蓮にはマミゾウのそれら振る舞いが、ろくでもない企みにしか思えなかった。

「こころさんは、マミゾウさんとよく会うのですか？　あまりあの方と仲良くするのはお勧めできません。あの方のなさっていることは、妖怪の立場を貶めるものにもなりかねないわ」

こころの面が、目を大きく見開いた大飛出にすり変わった。こころ自身もまた、両手を振って驚きを表現している。

「そうなのか？　私自身は随分、マミゾウに世話になっっているのだが。表情を作るのにも協力

してくれるし、よく舞台の段取りもつけてくれるぞ。仲良くしないのは私の暗黒能楽ライフに少なからず影響を与えかねないな。それに」

「こころは一拍おいて、手を口元にやる。」

「白蓮のとこの黒い奴だって、随分マミゾウと仲良くしているように見えるが。あれは野放しにしておいていいのか？」

「ぬえのこと、ですわね」

白蓮は目を伏せて、眉間に手を添えた。わずかな静寂。その時鋭敏になった白蓮の聴覚が、廊下をこつそり通り過ぎようとしている微かな気配を捕まえた。

「ぬえ？　そこにいるのでしょうか。ちよつと話があります、入りなさい」

「相変わらず鋭いぬえ」

再び開いた障子戸の向こうに、ぬえの姿が現れる。黒いワンピースの背中には、刃のような赤い右翼とくねる矢印のような青い左翼が別の生き物のように蠢いていた。

「あなたは今日も、マミゾウさんのところに行っていたのかしら？　いくら友達同士だからといって、みだりにあの方と会うのはやめて欲しいのだけれど」

「聖の頼みでもそればかりは聞けないよ、悪いけど」

間に座らされる形となったところが、猿面でかしまっている。

「あの方が人里で何を企んで立場を悪くされたとしても、とやかく言うつもりはありません。」

だけど、それに寺の妖怪が関わっていると見逃せません。当然、女苑もそう。度を越すようなら、力づくでもあなた達を止めなくてはならなくなるわ」

「聖の力づくは洒落にならないね。だけど、少なくとも今はそんな羽目を外してくない？」
「未来永劫そうであるとは思えません。あなたにはもう少し、寺の妖怪であることを踏まえた振る舞いをしてもらいたい。あなたの突拍子もない行動が、寺の者全てに迷惑をかけていることを自覚して欲しいわ」

こころが無機質な目でぬえを見る。ある異変の際、外界から幻想郷へマミゾウを呼び寄せたのは、誰ならぬぬえであった。だがその過程は、白蓮のあずかり知らぬところで行われている。おまけにその異変の元凶である仙人達とも、表面上友好的な関係を保っている。正直なところぬえのやっていることは、命蓮寺にとつて空回り以外の何者でもないのであった。

「まあまあ、今んとこあいつは人里で上手くやれている。寺に迷惑はかかんないって」

「その保証がないと言っているのです。前々から聞こうと思っていました、あなたは私達とマミゾウさんと、どちらの味方なのですか？」

「当然、両方」

即答だった。こころが若干仰け反る程度の。

「私が女苑みたく還俗復帰しないのは、聖のやっていることが人間と妖怪に利するものだと思じているからよ。そこは信用してもらいたい。だけどそこところはマミゾウも変わらないんだ。

聖とは手段が違うっただけで」

「あなた達のやっつていることは、人間をいたずらに脅かす行為にしか見えません。そのように言われても、鵜呑みにはできかねますが」

ぬえは腕を組んだ。

「うーん、そう言われるとちよつとがっかりするなあ。本気でそう思っているんだとしたら、私から言えることは何もなくなっちゃう」

ぬえは息を吐いて、立ち上がる。

「まだ話は終わっていませんよ？」

「そんなに疑うなら、自分で調べてみるといいよ。私から話しても信じてもらえるかどうかはわからないしね。そしたら信じられることも出てくるんじゃないかな？」

するりとぬえはその場を後にした。白蓮の伸ばしかけた手が、中空で止まっている。彼女はそれをゆっくりと下ろすと、小さく俯いた。

「私としたことが、弟子の虚言を疑ってしまったわ」

「白蓮が気に病むようなことには思えないのだが」

白蓮は顔を上げ、魔人経巻を両手に収める。幾何学模様は消え、竹軸だけが残された。

「でも、あの子の言うことにも理がないわけではありません。言われた通りに見ましよう」
「白蓮自らが出るのか。寺の方は大丈夫なのか？」

「あなたの心配には及ばないわ。私の弟子達は優秀ですから」
こころの面が姥にすり替わる。白蓮はそれを不安と受け取った。そつと彼女の肩に手を置く。
実際のところそれは不安は不安でも「いやあの妖怪ひら白蓮がいない間絶対羽目外すッスよ」
の不安だったのだが、その点に白蓮が気づくことはなかった。

§

茶屋の務めが終わったのは、日が沈んでから少し後のことだった。

女苑は、裏口から外に出る。伊達眼鏡は丸渕サングラスに替わり、額に引っかかっている。
首の下から側頭の上に乗まで持ち上げたお下げは螺子のように渦を巻く。頭に被ったミニチュア
シルクハット、ブランド柄が施された紫のコート、首にかけた金鎖のネックレス、両手の親指
を除く八本の指全てにはまった指輪、手首に通された金の腕輪、全てが派手派手しい。

これが疫病神、依神女苑の本来の姿である。闇夜に紛れてもなお、その姿は悪目立ちした。
姉にはよくたしなめられたものだが、それでも止めないのは彼女の意地のようなものであった。

西の空がまだ赤く染まっている折である。表通りに出たところで、次の行き先を思案した。
(しょっぱい報酬に、お客の接待。色々辛気臭いな。景気付けに盛り場へ出るか)

金回りの良さそうな者を引っかけ、恨みを買わない程度に財運を奪う。加減が難しいが、

不可能というほどのものでもない。幸せになるために富は必要だが、それが札束風呂や宝石の雨である必要もない。それが女苑の、命蓮寺修行時代に得た学びだった。

「さて、それでは今夜の標的でも探しに」

ひた、と鼻先に冷たい感触が走った。緩んだ頬が、左右一斉にずり下がる。

「嘘だろ？ 姉さんじゃあるまいに」

しかし天は残酷な真実を愚直に女苑へ伝える。腕に、足に、新たな滴が次々と降りかかった。それらは次第に間隔を狭め、路地に、女苑のコートに新たな濡れ跡を残し、面積を広げていく。女苑の中で、二つの選択肢が戦いを繰り広げた。雨に構わず疫病神の本懐を果たすか、それとも自宅に帰って雨漏りの面倒を見るか。

住み込み中、雨がなかったわけでもない。雨漏り対策も万全に施した。

それなら、帰るのが数時間伸びたところであまり問題はない。

問題はないはずなのに。なぜか、女苑の中で一つの映像がちらついた。

もやしのようにやせ細り、伸ばし放題の髪は針金じみてごわごわで。着た切り雀のパーカーには、つぎはぎ代わりに差し押しさえ状や督促状が縫い合わされている。そんな女の幻覚だ。

「ああ、畜生」

一声吠えて、強まる雨脚の中を走り出す。小一時間ほど走った先に着いた先は、どことなく獣臭さが漂う長屋街だった。並ぶ長屋はどれも即板や雨戸がところどころ破られており、この

時間にして既に洞窟の奥へ踏み込むような不気味さを醸し出していた。

女苑がさらに目指したのはその一軒。泥濘や犬の糞を飛び越えたさらに先にある、長屋街の最奥の家。前の住人が首を吊つたために安く借りられた、札付きの事故物件だった。

「ただ今、っているわけないか」

木戸を開ける。闇に慣れた目に飛び込んで来たのは、整理され尽くした空間だった。ブーツを脱ぎ捨て、手探りで土間から灯油を探し、行灯に火を灯す。

ほんやりした光が、四畳半の空間に命を吹き込んだ。

破れが酷過ぎてただの板と化していた畳に、莫塵を敷いてある床。布団は部屋の隅に畳まれており、使われた形跡はない。

あり合わせの木材で乱雑に補修した壁。傾きかけた衣紋掛けが一脚あるばかり。

部屋の中で、微妙に浮いた存在となつているドレッサーが一式。鏡にひびが走つてはいたが、自分の顔くらいは映せないこともない。

女苑はそれら全てを見て、安堵とも失望ともとれる大きな大きなため息を吐いた。

呉服屋へ住み込み奉公に出る前、最後に見た光景と、一寸の変化すらない。

「泥棒は、入らないか。金目のものは一緒に持ち出したしな」

衣紋掛けへ慎重にコートを引っかけて、アクセサリ類を全て外す。簡素なワンピースだけの姿になると、女苑は畳んだ布団の脇にへたり込んだ。

「くっそー、せめて帰りがけに八百屋に寄りゃーよかった。常備菜、なんてあるわけねーか。んなもん置きっ放しにできねーつつーの。今度、胡瓜でも漬けてみるかな。ああいうの、漬かるまでにどんくらいかかるんだろう」

一頻りぼやいてから天井を見上げた。雨の音は勢いを増しているが、雨が染みってくる様子は今のところない。

「こいつあ、いないうちに、あいつが帰ってきたなんてことはなさそうだなあ」

あいつこと貧乏神の依神よりかみしおん紫苑は、今ごろ空の上か。ずば抜けた天運を持つ天人に心酔して、現在はほぼ彼女と行動を共にしている、はずである。何しろ紫苑とは命蓮寺での修行中もその後、全く会っていないのだから。

紫苑の不幸は折り紙つきだ。本人が不幸になるどころか、周りにまで悪い結果をもたらす。女苑がどんなに富を溜め込んだとして、紫苑がたちどころに厄へと変えてしまう。

しかし、今は違う。奪った富が、確実に女苑の手元に残る。豪遊したりアクセサリーに変えて持ち歩いたりする必要もない。ゴールドリングは重くて持ち運ぶには堪える。

そう。今日は天運に見放されたが、明日になっても財は女苑の手元に残る。明日になったら改めて、誰かの財運を奪いに行こう。そうしたら早々に、مامィゾウとの縁も切れるはずだ。

その後は、どうしよう。雨音を聞きながらぼんやり考える。

念願の宵越し銭を持つか。しかし紫苑が帰ってきた時のことを考えると気軽に溜め込めない。

こんな事故物件からは引つ越して心機一転するか。しかしそれでは紫苑が帰る場所に困る。そんな思考を渦巻かせるうちに、女苑はぐしゃぐしゃと頭を掻いた。

「なんで姉さん前提で話が進んでんだよ。あいつはここに居ないつてのにさ」

紫苑が居なくなってくれた方が、不自由な生活を送れる。せいせいする。そのはずだった。しかし貧乏神は今も女苑の心に宿り、彼女の生き方を強く縛りつけている。

女苑は、紫苑をどうしたいのか。連れ戻したいのか、永遠に追放したいのか。それは女苑自身にも、よくわからなかった。

「あんたは今でも、私を財禍から守る神さんだよ」

うわ言のように呟いた後、女苑の意識は闇に落ちていった。

§

日付は変わる。人里の往来をマミゾウが、コツコツ下駄の音を立てながら歩いていく。

すれ違うマミゾウを気にかける里人はいない。彼女の頭に狸の耳はない。自らの胴回りよりも凶太い狸の尻尾もない。瓢箪の紋付羽織を身につけて颯爽と歩く様は里人の中に溶け込んで、まるで違和感はなかった。そこへ一人の老婆がすれ違いざまに、マミゾウに向けて手を振った。

「二ツ岩さん、また松の様子を見に来ておくれよ」

「おや、また虫でもついたかえ？　よからう、後で遣いの者をよこそう」

老婆と別れて十字路に差し掛かる。と、今度は横から子どもらが歓声を上げながら飛び出してきた。その中の一人がマミゾウの目の前で、路面の窪に足を取られる。マミゾウがとっさに手を差し出して、小さな惨事を未然に防ぎ切った。

「これ子ども、ここは人が多くて危ないぞい。もちっと広い場所で騒げ」

「ありがとう、マミおばちゃん」

走り去る子ども達の背中に、笑顔で手を振って見送った。無邪気なおばちゃん呼ばわりに、眉を動かすことすらない。

そんなマミゾウが、角の向こうにある人影を見つけた。とっさに身を隠すと、その様子を窺いながらほくそ笑む。

「おやおやお出ましか。どうやら今日は冷やかしに行かん方がよさそうじゃのう」

マミゾウはそれだけ言い残し、道を逆に戻っていった。

§

白蓮は門弟らの同伴を固辞して、人里へと入っていた。袈裟を身に着け笠をかぶった、伝統的な僧侶の装束である。

里人の住人は、大半が無宗教者である。加えて白蓮は男にも引けをとらない長身でもある。そんな白蓮が往来を歩くのだから、その姿は否が応にも里人達の目に止まった。

里人達の好奇の視線を、白蓮は知ってか知らずか。彼女は里中を流れる運河に面した、一軒の家屋にたどり着いた。庵の字が傾いた鈴奈庵の看板。

白蓮は入り口の前に妙な立て札を見た。札には「妖魔本の貸出始めました」の文字が踊る。

白蓮は事前の情報収集で、例の若旦那の目当てが貸本屋で働く「古本小町」であったことを掴んでいた。あらゆる文字を解読できる「判読眼」の持ち主を知らないわけではなかったが、実際に会ってみるのは初めてとなる。

「勢いここまで来てしまったけれど、どう話を切り出したものかしら」

白蓮は鈴奈庵を前にして、しばらく逡巡した。しかしながら、なぜマジゾウ達が妖怪騒ぎを起こしてまで小鈴を守ろうとしたのか、その理由くらいは知っておきたくもあつた。

意を決して、暖簾を潜る。

「ごめんくださいまし」

「はい、いらっしやいませ」

聞き慣れない音楽の流れる、本に埋め尽くされた空間。問題の小鈴は番台から顔を上げると、丸渕の眼鏡を外して白蓮の方を見た。番台の上には分厚い本が開かれているのがわかる。

その小鈴が開口一番、白蓮に言ったことには。

「あれ、あなたは。もしかして命蓮寺の住職様ではありませんか？」

「え、よくご存知で」

「ええ、『宗教戦争』の時は里で弾幕してたのも見てましたし。お客様としてご来店いただけるなんて光栄です。ご用件はあれですか、妖魔本のご用命でしょうか？ 解説に難のあるものばかりですが、多少の無理難題にも対応できる程度の書籍を揃えていると自負しております」

白蓮は珍しくもたじろいだ。ここまで市井の一般人にぐいぐい来られるのは正直意外だった。「ところで一度聞いてみたかったですけれども。命蓮寺には蔵書などございますか？」

「た、多少は」

「そういうのって職業柄大変興味があるんですよ。機会があればぜひ拝見したいです。一読させていただけるだけでも全く構いませんので！」

小鈴はなお目を輝かせて白蓮に迫る。他の里人とはまるで異なる距離感だった。この時点で白蓮は、なぜマミゾウが小鈴を守るのかなんとなくわかってきた気がした。

しかし、それで白蓮も踏ん切りがついた。

「今日はお聞きしたいことがあって来たのです。あなたが本居小鈴さん、ですよね？」

「マミゾウさん、ですか。はい、よく存じております。もうすっかりご最前にしていただいて」
「かなりの常連、ということなのですな」

白蓮は受け取ったティーカップに口をつけた。紅茶はあまり飲まないが、いささか風変わりな香りに慣れればあまり悪くないものではないと思つた。

「こういうことはとても聞き辛いのですが。あの方の本当の姿はご存知なのでしょうか？」

「本当の姿？ あの方の本性が化け狸だつてことですよね」

「なるほど、やはり。その際の経緯いきさつを伺つてもよろしいかしら？」

小鈴もまた白蓮の隣で、ティーカップを抱える。そこは鈴奈庵の片隅に設けられたテーブル。普段は本を借りに来た客の試読スペースとして用いられている場所である。上客には小鈴からお茶をサービスされる。ちょうど今のよう。

「いやー恥ずかしながら私、つい最近まであの方が人間のお客様だと思つてまして。私の目とこの店の妖魔本に興味を持たれたらしくて、ご来店なさつてたようなんです」

「目、というと。小鈴さんはどんな言葉で書かれた本でも読むこともできますか」

白蓮は唇を引き締め、魔人経巻を取り出した。軸を広げるや、幾何学模様流れ出す。

小鈴は問うまでもなく身を乗り出し、経巻が織りなす模様を目を奪われた。

「おおお、これは面白い書物ですね。外の人に見せてもらった『たぶれつと』みたい」

この反応に白蓮は内心唸つた。まず普通の人間ならば経巻を書物ではなく「虹色の光を放つ帯みたいな何か」としか認識できないものだ。

「ものすごい密度で情報が記されていますね？ これはサンスクリットかな？ ええと、物理

世界、精神世界、因果界」

白蓮は目を見開き、経巻を閉じる。店内が薄暗くなった。小鈴が目を瞬きさせている。

「あれ、もう終わりです?」

「ええ。あなたの目についてはよくわかりましたので」

法衣の下に汗の感触を覚えた。魔界に封印され一千年、暇を持って余して作った魔道の結晶が、白蓮の百分の一も生きてないであろう少女にいとまたやすく解読されたのだ。

魔人経巻は白蓮の法力に依って発動し、白蓮に代わって呪文を高速詠唱する知恵持つ魔道書である。白蓮以外の者には絶対に使えないはずのものなのだ。例え力ある魔法使いであろうと、千年万年を生きた大妖怪であろうとも。

しかし、小鈴は別だ。白蓮一人のために最適化された暗号化魔界言語すらも、彼女は読めてしまう。富くじの当たりを十回連続で引くくらい低い確率ではあるが、条件を整えば魔人経巻が「勘違い」を起こす可能性はなくもない。

「مامィゾウさんはあなたの目を、なんと?」

「そこら辺は私にも何とも。ここに来るのも妖魔本が目当てという感じでしたので」

白蓮は瞬時に考えを巡らせた。مامィゾウの主張に、嘘はあるまい。しかし小鈴の判読眼は、潜在的な可能性を多く秘めている。しかも、人一倍に好奇心旺盛だ。一つ間違えれば幻想郷のパワーバランスを覆すような異変の引き金にすらなり得る。مامィゾウの心中には、そんな小鈴

を影から日向から監視する意図もあるのだろう。

「老婆心ですが。あまりあの方には、深く関わらない方がよろしいかと思ひます。さりとして、あちらから関わつて来ては逃げようがありませんが」

「うーん、そうなんでしょうねえ。でも困つた時にはわりと力になつてくれますし。それに、いざつて時には霊夢さんがやつつけてくれると思ひますので」

と、小鈴は博麗の巫女の名前を出してあつげらかんと笑う。しかし白蓮からしたらどうにも危なっかしさが否めない。さらに一思案して、小鈴に告げた。

「そうですね、命蓮寺としてもあなたの相談には乗れると思ひますので。折を見て、参拝にいらしてくださいな。大した蔵書量はありますが、書庫を開いても構ひませんので」

「え、本当ですか？」

途端に小鈴が、目を輝かせる。彼女の無邪気さを利用するようで少々心苦しいが、このまま小鈴を野放しにしておくのも何かが違うと白蓮は考へた。

何より彼女をマミゾウの支配下に置いておくのは、少々気に入らない。

§

「へくちっ」

「マミゾウはくしゃみを小さく押し留めると、一瞬身震いをした。

「まったく、まだ寒いからのう。暖でもとるかよ」

「あ、あんた」

そこへばたばたと走り寄ってきた男が一人。マミゾウの横に並ぶ。

「おや若旦那、何事かの」

「なあ、返済を待って貰えんか。親父様から小遣いを止められて、工面がままならなんだ」

「マミゾウは周囲にちらりと目を配った。往來の人通りは多い。

「んん？ 仰つとることがよくわかりませんのう」

「そう意地悪なことを言わんでくれ」

「若旦那に構わず歩き出すと、ついついと路肩へ手招きをする。

「困りますのう。その話は表でせんようにとの約束ですぞ」

「切羽詰まってるんだ。なあ、頼むよ」

「そうは言われましても」

「マミゾウは腕を組んだ。

「女遊びはもうやらぬ。遊郭通いも止める。そういう約束で、遊郭のツケを肩代わりして差上げたはずですぞい？ しかし噂を聞き及ぶにまた遊郭に通つとるとかおらぬとか」

「な、何の話かな。人違いでは」

「ともあれ、口先の綺麗事だけでおいそれと期限を伸ばすわけにはまいりませんのう。せめて少量でも、誠意を貫えませんと。さもなくば僕らにも考えがありますよって」

「か、考えとは」

マミゾウは眼鏡のつるを掲げ持つ。反射光がマミゾウの眼光を覆い隠した。

「ご存知か、若旦那。人には腎の蔵が二つございましてな？ 一つ取っても死にやせんのです」
若旦那の顔から一気に血の気が消え失せた。

「や、止めてくれ！」

「冗談はさて置き、例えば今若旦那がお召しの着物や煙草入れ、財布に扇子。それらはみんな、女どもの気を引くために買い揃えたものでございましょう。そういうものを質に入れてでも、金を作る。それが目に見える誠意というものですぞ。違いますかな？」

若旦那は口ごもった。

「若旦那も商人の端くれならば、口先ばかりでなく行動でも信用を示せるようになりなされ。言い繕うだけでも騙せる者はおりましようが、多くの者はそうではござらぬ。期日までに多少の信用を見せられぬとあれば、闇医者を紹介することにもなりましようかなあ」

「か、勘弁してくれ！」

若旦那は逃げるようにその場を去った。残るマミゾウはため息をつく。

「まったたく、後始末も骨が折れる。小鈴に手を出さねば相手にする必要もなかったものを」

マミゾウもまた、歩き出す。往來の先に、ちよつとした行列が見えてきた。

「さーて、次の苦勞がお待ちかねじゃ」

§

昼下がりの茶屋は、時に似つかわしくない賑わいを見せていた。老若男女が入れ替わり立ち代わり、暖簾を潜り一息をつく。

「女苑ちゃん、次こつちお願い。三番の卓ね」「へーい」

新たな盆を受け取り、配膳に出る。すると女苑の一挙手一投足に、客達の視線が注がれた。下品なものも多少は混ざる。彼女はそんな注目にいちいち動じない。

「はいはい、そんなにジロジロ見たってサービスはないわよー」

「まあまあそう言わんと」「女苑ちゃんの働いてるとこ見るだけでも眼福じゃ」

客達の声を気さくに笑い飛ばしつつ、客の前に茶を並べる。

「あ、女苑センパイお久しぶりっすー」

顔を上げると、客席の一角で若い女性客のグループが手を振っている。

「なんの先輩だよ、なんの」

「店頭復帰したって聞いて、みんなで押しかけて来たんすよー。今までどこ行ってたんです？

「またご旅行ですか？」

「んふふ、まあそんなところ。今はお客さん多いから、積もる話はまた後でね」

「お疲れさんっすー」

笑顔でひらひらと手を振って、グループから離れる。首を客席の奥にひねるや、途端にその笑顔は吹き飛んで空の彼方へと行ってしまった。

「人気者じゃのう、おぬし。天職と違うか？」

「ええ。このままこぢんまりと看板娘やるのも、悪くはないかも知れないわ」

壁際の席に座る髪の毛の長い丸渕眼鏡の女が、鷹揚に笑う。木の葉の髪飾りが小さく踊った。

「儂もちいとばかしおぬしに話があつてのう。少し待たしてもらおうよ」

「そりゃあ、いいわね。歓迎よ。面倒な話じゃなければ」

店の一角だけ火花が散りそうな空気を醸している様子を、赤蛮奇が店の奥からじつと見る。

「あーあ、またシフト変更の必要ありかしら」

§

「そうですか」

それから数日後。白蓮は女苑が再び休職状態になったことを、赤蛮奇から知ることになった。

「赤さんは、女苑がどこに行ったかをご存知なのですか？」

「赤は名前じゃないっす。女苑ですが、そういうのは守秘義務があつて話せないんすよ。あと、女苑もママゾウ親分もそういうことは話したがるらないんで」

通りすがった女給が白蓮を一瞥して、そっぽを向いた。

「わかりました、出直しますね。それから、赤さんもたまには寺においで下さいな」

「ご好意はあり難いんですけど、念仏はトラウマなんで」

赤蛮奇は素っ気なくして、茶屋に戻っていった。白蓮としては彼女がかつてどんなトラウマを負ったのか、ほんの少だけ気にかかった。

だが直近の関心事は女苑とママゾウの方である。茶屋を出て、里の出口へと引き返しながらかえる。また、どこかの人間をたぶらかすつもりなのか。

小鈴の一件で、理解したつもりであった。ママゾウは純粹な悪意から、襲撃を企図するものではない。しかしそれでも、やり方に問題があることには変わりがない。どうにかして止める手立てはないものかと、思い悩みながら里道を歩く。

そもそも女苑が向かった場所がわからなければ、手の施しようがない。ママゾウやぬえから聞き出そうとしたところで、素直に教えてくれるとも思い難い。ことによっては、少々手荒な手段を用いても二人に「尋ねる」必要があるだろうか。

「おや、白蓮ではないか。随分怖い顔をしているが、どうしたんだ」

知った声が聞こえて来た。顔を上げると、里道のはす向かいにころが立っていた。白蓮は顔に宿った緊張を解く。

「すみません、少々考え事を。ころさんはどちらに？」

「私の用事は先程終わったところだ。新たな舞台を所望されていてな」

白蓮は歩く向きを変え、こころと肩を並べる。

「新たな舞台、とは？」

「さる商家のご主人が、私の舞を気に入ったらしくてな。ぜひ間近で見たいというので、その打ち合わせをしてきた。それで、白蓮はどうしたんだ。私はきちんと話したが」

「そうですねえ」

こころは人里の情報収集で世話にもなっている。白蓮は隠し立てせず、マミゾウ達の新たな企みについて話すことにした。解決にはならないだろうが、気分は紛れる。

「女苑はまたどこかで人間の振りをして、マミゾウさん達のために働いているのでしょいうね。」

どこへ行ったものかと思案していたのです。あなたに話しても仕方のないことでしょうか」

「あの疫病神なら、さつき会ったぞ」

白蓮はこころを見て、凍りついた。こころは腰に手を当て、胸を張っている。

「さつき、とは」

「だから、さつき打ち合わせに行った商家で。遠巻きに少し見えたただだし変装もしていたが、

あれは間違ひなく疫病神だ」

白蓮は絶句した。こんな偶然があつてもいいものだろうか。ともあれ、マミゾウ達の狙いを思いもよらぬ形で知ることができた。

そこではたと気づいて、こころを見る。

「どうした？」

こころが例によつての無表情で白蓮を見ている。こころが商家で舞の披露をねだられたこと、マミゾウ達はその商家を狙っていること。これらは本当に、ただの偶然なのだろうか？

「こころさん。その商家のこと、詳しく教えて下さらないかしら」

(今日もタヌキに無茶振りされる 続く。後半は製品版にて)



2784545018086



2920193010007

佐渡の二ツ岩、幻想郷の二ツ岩となつて、未だ帰らず。恐れを知らぬ古狸に、何か恐れるものはあるのか？ 偽者の脳内の「はぐれ命蓮寺トリオ（マミぬえ女苑）」、今回はマミゾウが中心のお話。

人里を舞台に繰り広げられる、妖怪達の奇妙な「冷戦」。勝者は、果たして誰になるのか。

白蓮は人里で暗躍するマミゾウ、ぬえ、女苑の三人に心を痛めていた。彼女らは連携して人々を混乱に陥れ、自在に操る。その裏には妖怪を食い物にしようとする不遜な人間をこらしめる狙いがあった。白蓮はマミゾウ達の思惑に賛同できなかった。女苑を命蓮寺に誘い、マミゾウの子分達にも声をかけていくのだが……